

『42年度教育課程の改訂』一九六六年三月（明治図書）

教育課程改訂への提言―特活・道徳・一般編

## 知識主義から能力主義へ

はじめに―思い切るといふこと

ここ数年のうちに、教育課程を根本的に改めなければならぬという社会的要請がもはやはっきりしてきたといってもよいのではなからうか。新しく認められた教育課程によって育てられる人々は、二十一世紀になってからその人生の最もさかりの時を過ごす人々である。その二十一世紀の社会がどのような社会かをはっきりいうことは、もとよりできないが、しかし現在、その社会を予想するさまざまな材料は見えはじめている。われわれは、それを人々の動きや、産業の動向、国際社会の進展の中に見ることができるといえる。二十一世紀にはわが民族は、いままでよりはるかに高い、充実した人間的な能力、すなわち、人格、知性ともすぐれた人間でなければ生きのびることはできない。

現代の社会は、どこから見ても、たるんでいるように思える。ちやうど戦争中は、どうみても勝てそうにないにもかかわらずなんとなく神だのみしてどうにかなると思っているうちに、結局どうにもならなくなつたが、あのように、いまの日本の社会はどこを見ても、ピーンと緊張して、上昇して行くような張りがあるように思えない。どことなくだらけている。しかしこれまで本気になって、改めようという気風も起こってこない。なんとかなるだろうと思っているうちに、ど

うにもならなくなるのではなからうか。なんとかなるのではなく、なんとかしなくてはいけないのである。

そのなんとかしようという気力が、みえないのである。教育課程の改定も、まあなんとかなるという従来の情性で考えていいものかどうか。思い切った改定をといつても、いろいろ行きがかりで思い切れないで、そのうちに手遅れになるのではないか。思い切るといふ心が人々にないのは、なんとかなると思っているからであろう。それを改めるのが第一の仕事であろう。

### 教育課程というものの考え方

まず第一に教育課程というものの考え方を改める必要があるのではないか。カリキュラムというのは、語源は走路のことで、生徒の走る道だなどということ、昔からいわれているが、現在の教育課程の実質は生徒のためのものでなく、教師の走る道の観を呈している。学習指導要領には目的、内容、指導上の注意などといったことが述べられているが、それらは教師のなすべきことという色彩が強い。しかし、すべての教師がこれを見て、何をなすかということを考えるかという、それすら行なわない教師が多いこともまた周知の事実である。そういう点から考えると、教育課程の実態は教科書をつくるためのよりどころといった性格が強く、教師は教科書をもって、割り当てられた時間を過ごせばよいこととなる。

教科書には生徒がおぼえなければならぬ知識が書かれている。それは余り詳しく述べるほどページ数がないから、教師によって解説が行なわれる。教師は教科書の解説者であり、教育とは結局、教科書の教材解説が中心だということになる。教育課程とはそういう全体構造の中に位置づけられている。

## 知識主義をやめて能力主義へ

教育課程がこのようなものになったのは、根本的には教育観に問題がある。教育とは、さまざまなことをわからせることだ、理解させることだという考え方がなくなるとある。それは知識を与えることであり、インフォメーションを与えることだということになる。人間一人ひとりの能力を開発することだという考え方が希薄になり、いわゆる知識の羅列主義になり、教育課程全体が、観念的な知識教育になる。教育課程には、理解させる事がらが羅列されている。態度とか技術とかいっても、やはり知識として与えることが主となる。

基準性などということがいわれるのも、その観念的知識主義の上に立って、これだけのことは与えるべしというような基準性である。一見合理的であるかのごとくであるが、人間が実際に同じように知識を受け入れているということができると考えると、そんなことはあり得ない。全くの形式主義でしかない。

学校の教師をみてるがよい。中学校や高等学校の教師で、生徒といっしょになって、自分の専門以外の教科のテストを受けて、生徒なみの点をとれる教師は余り多くはないであろう。

教育とは、いうまでもなく、一人ひとりの能力を開発することであり、教えられたことをただ記憶していることでなく、自分の直面する生活の場面を、自力で乗り越えて行く力を養ってやることである。自力で生活処理できるようにするには、それだけ頭脳を訓練しなければならぬ。ただ教師の教えることがわかるということではないのである。教育課程は、そういう生徒を訓練する場合の体系なのであり、生徒の行動の道すじなのである。

## 教育内容の精選

さて以上のように考えると、教育課程の改定に対しては、相当根本的な切り替えが思い切って行なわれなくてはならない。

まず第一にどの教科も、あれもこれもと教える内容をこれまでの知識主義的な考え方にしたがって羅列することをやめて、ほんとうに必要な能力は何か、基本は何か、基礎能力は何か——という考え方で内容を半減することをやるべきである。これは各教科ごとにそれぞれ行なうべきである。

これまで教育課程の改定となると、各教科の研究者たちの圧力団体が、時間の奪い合いをする、などということがあったようであるが、そういうことをやる前に、まず教科ごとに内容の半減を実現しなくてはならない。いわゆる教材の精選といわれることもこれである——。それには根本的に能力開発主義に立つて行なう必要がある。

## 画一性を排除して個人への適応性を

次にカリキュラムとは、生徒が一斉に分列行進をして通りすぎるものだという形をやめるべきである。これは一種の悪平等主義である。形式主義である。たいせつなことは、カリキュラムを通過したときには、具体的に力がついていることである。

人間がほんとうにできるようにするには、人によって差がある。あるものは訓練の時間をうんとかけなければ、ほんとうにできるようにならないし、あるものは短時間で成果をあげるものもある。それがまた教科によってもさまざまであろう。そういうことを無視して、みな一律平等に、一斉に分列行進のごとく歩かせて教育する——ということがおかしいことなのである。それは教育課程が教師中心だからであ

る。教育課程は被教育者のものである。被教育者が力をつけて行くものである。

これは教育課程の運用に属することかもしれないが、こういう運用をするものとして教育課程を考えないと、真に人間を育てるもの——とはなりえないであろう。

### 多様性を生かす選択制

このことは、必然的に教育課程の融通性・柔軟性ということを強調することにもなる。生徒の側からすれば、生徒の多様性に応じて教育課程も多様になりうるということである。これは特に中学校・高等学校において考えられなければならないことである。

中学校や高等学校における選択制は、もともと全面的に幅広く行なわれなければならない。現在のような選択制は無きに等しい。一種のごまかしである。しかしそこには、教育観に根本的な間違いがある。画一主義にて人間教育ができると考えているのは、前世紀的である。中等教育の段階では、あらゆる面で生徒の能力を育てることを考えなければならぬ。そうでなければ、人口が減少して行くときに、文化、生活、産業、技術などの水準を維持できなくなるであろう。

選択制はさまざまな教科の種類を設けるという方向での多様化であるが、一つの教科においても、生徒の能力に応じて、課程の通過の仕方にさまざまなものがある。現代の高等学校や中学校では、ついていけない者がいる——ということがいわれているが、これは問題の出し方が逆である。いまのカリキュラムは、すべての人間を教育することに失格だったのである。つまり、教育課程こそ批判されなければならぬ。個々の生徒が、自らのペースで歩くことのできる教育課程にしなくてはならない。

### 道徳教育と特別教育活動の再編成

ここでは具体的な教科の一つ一つについてはいわないが、全体として教育課程を観念的知識主義から脱却させなければならぬ。その点でまず特に考えるべきことは、道徳教育、特別教育活動などの取り扱いである。これらは、現在の教育では添えもの的な存在であることは周知の事実である。これは教育課程全体のおき方、構造の問題である。人間の能力開発の場としてこれらのものを考え直さなくてはならない。道徳教育が生活の全面において考えられなくてはならぬことはいうまでもないが、その具体的なあり方がはつきりされなくてはならない。人間の能力のうちで、モラルというものは最もたいせつなものである。観念的な教条を与えるだけでは、知能犯をつくる結果になる。行動のできる人間をつくらなければならないのである。

特別教育活動といわれるものも、見直されなくてはならない。それは社会的人間としての行動力をつくり上げる場であって、そういう場で正しく、りっぱに行動のできるものが、人間としての目標でなくてはならない。これがおそなえ物的な取り扱いを受けるところにこそ、現在の教育課程の不適合性があるのである。

＞矢 口 新<